

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳「『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価」翻訳刊行記念特別講義①義認論の前提としての、聖書における「罪」理解

https://youtu.be/QhVF2g92D_c

+

生駒聖書学院には大変お世話になっている。ラッド著『終末論』の翻訳・刊行の際にも、2015年5月19～20日に刊行記念特別講義をさせていただいた。

今回も、ベネマ著「『パウロ研究の新しい視点』再考」の翻訳・刊行にあわせ、刊行記念特別講義をさせていただくことができた。わたしは、翻訳が翻訳書の刊行（第一弾）で終わるのではなく、「その翻訳書がどのように読まれるべきか」の助けとなるビデオ講義録（第二弾）を提供すべきと考えている。また、年末には『福音主義神学』誌所収で「福音主義義認論—NPPに立つ“N.T.ライトの義認論”に関する一考察」（第三弾）も執筆している。たまたみかけるように“矢を放つ”ことにより、相乗効果を狙っているのである。

これらの努力により、多くの人に「書籍購買を喚起」し、講義により購入して下さった方に「理解する助け」をなし、さらに深く学びたい方のために論文で「学びのための鳥瞰図を提供」しているのである。

ルーテル学院大学ルター研究所・所長の鈴木浩氏は、「義認論は原罪論の上に成立しました。ですから、義認論の力強さは、罪認識の深さに正確に比例しています。…逆に言えば、罪認識が希薄になればなるほど、義認論の輝きは薄れます」と記しておられる。

まず、宗教改革の義認論の前提としての、「パウロ→アウグスティヌス→ルター、カルヴァン等」の罪論理解を簡潔に学びたい。これは、2010年に刊行された『聖書神学事典』（いのちのことば社）で、エリクソン著『キリスト教神学』や『キリスト教教理入門』（準備中）等を資料源に、聖書における「罪」についての理解を簡潔に整理した拙論稿である。①聖書における「罪」理解を学んだ後、②聖書における「罪」の用語・定義・本質的要素、③歴史における「罪」理解の変遷と現代の文学・哲学における「罪」理解を、H.G.ペールマン著『現代教義学総説』等から学びたい。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価』翻訳刊行記念集中講義—②義認論の前提としての、聖書における「罪」の用語・定義・本質的要素

+

<https://youtu.be/VaRDcJ-WE1Y>

+

さて、九月はじめに、ベネマ著『パウロ研究の新しい視点』再考』をいのちのことば社から翻訳・刊行させていただき、好評販売中です。この販売をひとつの契機に、刊行記念特別講義(第二講義)をさせていただきましたので、ご紹介します。

+

わたしが最初に“罪意識”に目覚めたのは、三浦綾子さんの『氷点』からであった。この小説のテーマは“原罪”である。黒古一夫著『三浦綾子論—愛と生きることの意味』には、著者の原点が、「罪」とは何か、という問題意識にあり、「氷点」がベスト・セラーになった最大の理由は、まさにこの人間存在の根源に関わる「原罪」問題をキリスト者固有の世界に限定せず、広く普遍的問題として捉え直し、作品のテーマにしたところにあった。

そして、人間へのひたむきなまでの関心は、人間のどうしようもない否定的な面を多々取り上げながら、底意に“よりよき人間の生”を希求する熱い思いがあり、それがまた多くの読者を励ましもするのである、と記しておられる。

わたしにとって、聖書に啓示されている“罪論”研究、そしてわたしたちの希求してやまない“幸せな生”を阻害し、破壊する根源的な要素・課題としての“原罪”の問題を研究していく手がかりを三浦綾子著作集にみるのである。

この第二講義では、そのような視点から「三浦綾子論」の魅力に言及している。関心のある方はご視聴いただきたい。

+++++

さて、H.G.ペールマンは、教義学（あるいは組織神学、キリスト教神学）の四つの基本的機能について記している。それは、①実存的（ないし教會的）機能、②再生産的（ないし要約的）機能、③生産的（ないし新理解的機能）、④合理的（ないし学問的）機能である。

+

今日、ホットな議論の中にある「パウロ研究の新しい視点」は、高度に学問的な議論の側面があり、ベネマによればそれは“脅迫的”ですらある。その議論の中に入ると「第二神殿ユダヤ教」について詳しい学びをした者でなければ、それを背景として読まれるべき聖書について「発言権すらない」かのような印象を受ける。聖書は、いわば“第二神殿ユダヤ教研究の専門家”のみに開かれた書物であり、“第二神殿ユダヤ教のサングラス”を持たない人には閉ざされた書物であるかのようなのである。

+

しかし、このような見方は、根本的に誤った捉え方である。「キリスト教神学の領域全体

の見取図」を見ると、一般に「キリスト教神学」は、(1)聖書学部門、(2)歴史神学部門、(3)組織神学部門、(4)実践神学部門の四部門に分類される。

+

今回のテーマにおける聖書とその背景としての「第二神殿ユダヤ教研究」の関係は、(1)の聖書学部門の中の、i)「聖書言語」の学び、ii)旧新約聖書の「緒論」の学び、iii)「聖書史」の学び、iv)「釈義」の学び、v)「聖書神学」の学びの範囲で、iii)の聖書史の領域研究に属する。具体的には、イスラエル史と原始キリスト教史の研究である。これは聖書の歴史の実相を明らかにすることによって、聖書の内容の理解に資することを主眼としているが、同時に、聖書の歴史と関係を持っていた周辺諸民族の歴史をも取り扱う。近接学科として、時代史、考古学、地誌学などがある。その中の一分野として「第二神殿ユダヤ教研究」がある。

+

ただ、「聖書のみ」の原則に立つ福音主義キリスト教の立場からすると、聖書は歴史的にも原理的にもキリスト教信仰にかかわるすべての事柄の出発点であり、規範的根拠である。そのために、旧新約聖書そのものの研究は、神学研究全体において最初の位置を占め、中心的な領域を形作る。

+

神学が真に聖書的であるためには、聖書をありのままに受け取らなければならない。つまり、聖書自身の用語で聖書を受け入れ、聖書そのものの基盤に立ち、聖書自身の見地から研究し、その成果を提示すべきなのである。私たちは聖書を無理に異質の哲学思想（あるいは、第二神殿ユダヤ教研究）の中に押し込めてはならない。

+

我々は、歴史的に、旧約的に、契約的に研究され続けている「第二神殿ユダヤ教研究」からは大いに学ぶべきである。しかし、わたしたちは、それらの研究からの洞察を「第一義的に聖書」に立脚しつつ、側面的資料として建德的に活用すべきなのである。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳『『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価』翻訳刊行記念集中講義—③歴史における「罪」理解の変遷、そして現代の文学・哲学における「罪」理解—【導入として】

+

第三講義を紹介する上での導入として、わたしの求道生活期における文学・哲学への関わり、それからの助けを分かち合いたい。

+

『宗教的カリスマ的経験の座標軸』（アマゾン書店、Kindle版）というテーマで、二年間執筆させていただいたある雑誌の「回心」シリーズ三部作の一文である。今日は『⑩“氷点”を照らし、溶かすお方としての聖霊』である。

+

■罪について

本田弘慈師の「ここに愛がある」という伝道映画を契機に教会に足を踏み入れた私であった。誘われて毎週日曜朝に礼拝に集うようになった。讚美と祈りと証しには、聖霊の臨在があり、身も心も洗われるひと時であった。「自分もクリスチャンになりたい」と心から思った。しかし「悔い改めて、福音を信ぜよ」（マルコ1・15）と語られる。クリスチャンにはなりたいたのだが、自分はそれほど罪人であると思わなかった。自分の身代わりに神の御子キリストが刑罰を受けなければならないほど罪深いとは思わなかった。自分が地獄で永遠に刑罰を受けなければならないほどの罪人とは思わなかった。自分の罪の深さが分からないから、十字架を自分との深い関わりの中で受けとめることができなかった。それで「神さま、もしあなたが本当に生きておられるのであれば、私がどれほど罪深い罪人であるのかを教えてください」と祈った。初めての真剣な祈りであった。

夏となり、KGK（キリスト者学生会）のキャンプに誘われた。ある夜、主事であった片岡伸光師は、ニーチェを愛読する無神論者で、ダーウィンを信じる進化論者の私を根気よくカウンセリングしてくださった。私は心の中にあつた「キリスト教」に対するあらゆる疑問を強く問いただした。おそらく、主事は「この青年が救われるのはかなり難しいだろう」と思われたのではないかと思う。しかしそのとき私の心には大きな変化が起きつつあつた。疑問は解けていなかったが、なぜか心はいたく虚しくなつていた。

+

■義について

最後の夜、キャンプ・ファイヤーがあり、証しのときがあつた。あるクリスチャンが涙ながらに自分の心の罪の告白をし、心の底から悔い改める姿を見た。その瞬間、聖霊は私に触れられ、そして心の奥底を照らされた（ローマ8・27）。私は“罪”を刑法上の事柄と考え、「自分はイエス・キリストに十字架で身代わりに死んでもらうほど、罪人ではない」と考えていた。しかし、その涙ながらの証しは、私の心を打ち、「クリスチャンは、表面上の罪のみを問題にしているのではない。聖い神の前に、心の奥底まで照らされ、聖く正しく、真実

に生きんとしている人たちなのだ(ヘブル4・13)」と教えられた。その夜一大決心をした。「私も、このクリスチャンのように一生涯、神に渴き、聖書を食して生きていこう」と。

+

■裁きについて

その後、大学生の日常に戻った。講義を受け、油絵を描き、マージャンを打ち、夜半に「無為な一日を過ごした」ことを後悔し、酒を飲み床についた。ただ寝床で「聖書だけは読んでから寝よう」そう決めていた。渴ききった心に御言葉の種は蒔かれていった。私は、殺人とか姦淫とかの刑法上の罪は犯していないが、心の奥底に、殺人の種、姦淫の種が潜むことを照らされた。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです(マタイ5章)。神の聖い方であること、その峻厳を教えられた。私の内に潜む罪は私の“生”を破壊する力のみならず、永遠の苦しみをもたらす最も憎むべき元凶であると知った。

三浦綾子著『氷点』の中で、主人公の陽子は遺書をしたためている。「私は人を殺したことはありません。しかし法にふれる罪こそ犯しませんでした。考えてみますと、父が殺人を犯したということは、私にもその可能性があることなりました。自分の中の罪の可能性を見出した私は、生きる望みを失いました。いま陽子は思います。一途に精一杯生きてきた陽子の心にも、氷点があったのだということ。私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は『お前は罪人の子だ』というところにあったのです。」私も、心の内奥を照らされ氷点を見出した。そこで凍てついている自分自身を見出した。しかし、聖霊は凍てついている私を照らしだすのみならず、そのような私自身を溶かしてくださった。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価』翻訳刊行記念集中講義—③歴史における「罪」理解の変遷、そして現代の文学・哲学における「罪」理解—【導入として】

+

第三講義を紹介する上での導入として、わたしの求道生活期における文学・哲学への関わり、それからの助けを分かち合いたい。

+

『宗教的カリスマ的経験の座標軸』（アマゾン書店、Kindle版）というテーマで、二年間執筆させていただいたある雑誌の「回心」シリーズ三部作の一文である。今日は『⑩自分の胸の底に生れた時から潜んでいるもの』である。

+

前回は“氷点”を照らし、溶かすお方としての聖霊について考えた。この“氷点”とは聖書で言う「原罪」を意味する。昨年夏、『聖書神学辞典』の五つの論稿を依頼された。その中のひとつが「罪」であった。

+

■夏目漱石著『ころ』

十九歳のとき「神さま、あなたが本当に生きておられるのであれば、私の罪がどのようなものなのかを、教えてください」と祈った。罪を悔い改めて、私の罪の身代わりとなって刑罰を受けてくださったイエス・キリストを信じてクリスチャンになりたいのだが、自分の罪が神さまの前にいかなるものであるのか分からなかった。

そのような時に、文学書や哲学書はいろいろと助けになった。夏目漱石著『ころ』の中に「私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚きました。私はぞっとしました。然ししばらくしている中に、私の心はその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。私はただ人間の罪というものを深く感じたのです」とある。

この小説はおもに、主人公と先生、友人K、下宿屋をしている未亡人とその娘さんの四人が登場してくるストーリーである。善人である先生の「ころ」のうちに暗い影があり、それが先生を苦しめ、やがては自殺に追い込む。その構成は「自分の胸の底に生れた時から潜んでいるもの」を解き明かすかたちで展開していく。

「その感じのために、知らない路傍の人から鞭うたれたい。人に鞭たれるよりも、自分で鞭つ可きだ。自分で自分を鞭つよりも、自分を殺すべきだ」という考が起ります」と続く。祈り始めてから、しばらく後のことである。聖霊はあらゆる機会を生かして私の心の奥底を照らして下さり、私もまた「道を歩いている時、知らない路傍の人から鞭うたれたい」と思うようになっていた。

先生は、“善人”だと思って生きていた。しかし、その善人の「ころ」の中心部に“罪”と

いう虫が巣くっていることに気がつく。聖書でいう“原罪”の問題である。すべての人間は、アダムにあって、神の御前に罪深い道徳的腐敗と罪責の問題を背負って生まれてくる。

+

■「罪」という問題

「罪」という問題は、きわめて分かりにくい問題である。聖書において罪を表す用語は「不信仰・反逆・強情・的をはずす」等、多様性に富んでおり、それぞれがいくらか異なった側面を強調している。この当惑するような多様性の中から総合的定義を形成することが求められる。

しかし、罪とは一体何であるのか。罪の特徴を貫く共通した要素は、罪人が神の律法を成就することに失敗した、という考えである。旧約においては、多くは外的行為の問題である。新約においては内的な思いや動機が行為と同じくらい重要視されている。それゆえ、聖書においては罪とは、悪しき行為や思いだけでなく、生来の内なる傾向の問題なのである。

さらに、多方面にわたる相違の中で特徴づけるひとつの潜在的要素として「肉欲・自己本位・神の排除」等の見解があるが、旧約の十戒、新約の一番大切な戒めから、神をふさわしく認めることが第一である。肉欲・自己本位等、いかなる形であろうと神のみにふさわしい第一の場所に他のものを置くこと、つまり偶像礼拝こそが罪の本質である〔『聖書神学事典』いのちのことば社、所収論稿、安黒務「罪」参照〕。

+

■絶望の中の感謝の雄たけび

燦々と降り注ぐ陽光の下に害虫は存在しえない、布団干しのごとく滅菌されるのである。しかし湿気た石の下には虫はうようよしている。バイ菌の天国である。私たち人間は神に向けて創造された存在である。神に心を閉ざし、その光を受け入れないとき、私たちの心は暗くなり、欲望のうごめく世界となる。神を神として崇めず、感謝もしないとき、その思いは空しくなり、その「こころ」は暗くなる（新約聖書ローマ人への手紙 1:20-32）。

漱石は、「自分の胸の底に生れた時から潜んでいるもの」を洞察し、見事な小説を書き上げた。その「人間に対する深い洞察」には驚嘆させられる。ただ解決策が示されていない。しかし、聖書にはその絶望の只中で感謝の雄たけびがある（ローマ 7・24-25）。

我らは「罪のからだ、死のからだ」意識を持つ者であるが、我らの主イエスは大声で叫んでおられる「ラザロよ、出てきなさい！」（ヨハネ 11:43）と。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳『『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価』翻訳刊行記念集中講義—③歴史における「罪」理解の変遷、そして現代の文学・哲学における「罪」理解

+

第三講義を紹介する上での導入として、わたしの求道生活期における文学・哲学への関わり、それからの助けを分かち合いたい。

+

『宗教的カリスマ的経験の座標軸』（アマゾン書店、Kindle版）というテーマで、二年間執筆させていただいたある雑誌の「回心」シリーズ三部作の一文である。今日は『⑱蚊を殺すことと、人を殺すこと』である。

+

ここ数回、私の求道期を回想している。前回は、私たちの胸の奥に生まれたときから潜んでいるもの、すなわち「原罪」について考えた。私は自身の経験から、聖霊の最も重要な働きのひとつは「原罪」を照らす働きではないかと考えている。このことと関連し、ひとつのことを思い出した。

+

■ニーチェ著『ツァラトゥストラかく語りき』

関西学院大学（KG）にはたくさん思い出がある。そのひとつは哲学者ニーチェとの出会いである。一般教養科目で選択したのが「哲学」であった（その他、KGで林教授『キリスト教学』、野田又男教授『哲学』、KTS(神戸改革派神学校)で春名純人教授『キリスト教哲学』、KCI(共立基督教研究所)で小畑進教授『哲学』、稲垣久和教授『キリスト教哲学』等を学ぶ機会があった)。その時、「哲学」の津田教授はニーチェの専門家ということであった。この講義を機縁に、ニーチェの著作を読むようになった。やがてニーチェの主著『ツァラトゥストラ、かく語りき』は私にとってバイブルのようになっていった。この本の綴り糸を解いて、バラバラにし、Gパンの後ろポケットに入れて、時間を見つけては読み耽った。

「神なき人生に生きる強者としての人間—生命のない状態から無限の時間の中で、単純な生命体が生まれ、それは陸に上がり、やがて二本足で立ち、類人猿は人間へと進化していった。しかし、この人間もまた進化途上の存在であり、やがては“超人”へと進化する。このような無神論的な世界観、進化論的な人間観は、当時の私にとって大変魅力あるものであった。

あるときに、「青白い犯罪者」の個所に差し掛かった。その一節に「しかし、思念と行為は別ものである。それと行為の表象とはなおさら別ものである。それらのあいだには因果関係の車輪はまわっていない。」この個所を読んだとき、無神論と進化論の本質を垣間見たような気がした。神なき世界とは道徳のない世界である。進化の世界は弱肉強食・適者生存・突然変異の世界である。「殺意」と「殺人の行為」と「殺人の結果」とはなんらの因果関係なきものとしたら、神なき・進化の世界において「蚊を殺す」と「人を殺す」ことの間には

差異はない。アウシュビッツのユダヤ人虐殺も、南京虐殺も、広島・長崎の原爆投下も同じ次元の問題なのか、と愕然としたのである。殺意を抱いた人間と殺人の行為を犯した人間と殺害された人間の現実との間に、“因果関係の車輪が回っていない”としたら、神なき・道徳なき・責任も裁きもない世界になってしまう。

+

■良心は裁きを知っている

聖書においては、宇宙に「天体の運行法則」があるように、人間の心の奥底には「道徳法則」が存在する。被造物の冠である人間は道徳的な存在者、人格をもつものとして造られた。これらは、被造物世界の背後に、創造者であり、道徳的な人格者である神の存在を示している。人間はなぜ人間を殺戮して平然としておれないのか。それは人間の心の奥底には善悪を判断する“良心”があり、それは聖い神の義なる審判を知っているからである。しかし、人間はなぜ時に血に飢えた獣のように悪辣になれるのか。それは、アダムにおける“原罪”ゆえである。全人類はアダムにあつて罪を犯した。そのことにより、全人類は神の御前に罪責ある者となり、罪と腐敗の性質の中に生きるものとなった。

+

■私たちの肉性を反映する鏡

聖書の視点からみれば、アウシュビッツも、南京も、広島・長崎も、人類に普遍的に存在するアダムにある性質に起因するものである。この世界にあるあらゆる悪は私たちの“肉の性質を反映する鏡”である。その意味で、アダムにある私たち全人類は断罪されるべき存在であり、ゴミのように火の池で滅ぶべき存在である。私たちはこのことに留意すべきである。実に、キリストにおいて、私たちの古きアダムの性質は断罪され、絶滅させられたのである。では、私たちの現在の“生”とは一体何であるのか。それは、キリストにあるよみがえりのいのちによる“生”であり、新しい創造の端緒である。

ドストエフスキー著『悪霊』の準備ノートにこのような一節がある。「キリストに出会ったことのない人は、いまだ生きたことのない人である」聖霊は、私たちの“肉”性に十字架における断罪の原理を適用し、死臭を放つ私たちの存在をよみがえらせるようにして生かされるのである(ローマ8・9—11)。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳「『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価」翻訳刊行記念集中講義—③歴史における「罪」理解の変遷、そして現代の文学・哲学における「罪」理解

<https://youtu.be/cVlvdyzWOb0>

+

H.G.ペールマン著『現代教義学総説』は、「組織神学」を教える神学教師にとって大変助かる本である。聖書と歴史と現代の議論を眺望して見せてくれるからである。わたしは、講義や講演、また『福音主義神学』誌の編集において、扱うテーマに関し、まずペールマンを熟読することになっている。というのは、わたしたちはとかく“鹿を追う者、森を見ず”になる傾向があるからである。“森の中で道に迷わない”ために、教義学のひとつひとつのテーマに関し、まず“鳥瞰図”を手に入れることが大切である。

+

ペールマンの「罪について」の章は、A. 前提—(1)聖書によれば、(2)古代教会においては、(3)アウグスティヌスの罪悪論は、(4)ルターは、(5)古プロテスタント正統主義は、と説明が続き、「(6)啓蒙主義の神学は、伝統的な原罪論に対して鋭く批判をした」と急変する。

今日のNPP問題の根もまた、この18世紀の啓蒙思潮に発する19世紀の自由主義神学に深い関わりがあることに留意しておくべきである。

+

B. 現代の論争—この論争は、(1)罪の本質と認識、(2)原罪の問題性、(3)悪と現代人、(4)悪と現代的価値の変化で構成されている。

文学・哲学等の豊富な内容から一つだけ取り上げる。「啓蒙主義において、...罪はもはや宗教的概念ではなく、むしろ社会的ないしは人間論的なものである。現代人は、神をその視野から失ったため、神に対する罪はもはや存在しない。ただ、隣人に対する罪、第二の板に対する罪のみが存在する。...

<神に対する信仰なしには善たりえない、不信仰から悪が出て来る>というキリスト教の提題に対し、鋭く反対する。...

近代のあらゆる価値の変化の渦の中で、悪の概念は、キリスト教の伝統とは違った全く別の内容をもった、同時にただ単に神に対する罪ばかりでなく、次第に人間に対する罪をも追い出してしまった。

第一の板の破壊は、いわば第二の板を粉砕してしまった。...

+

“新しい板”は言う。『強固になれ』と。キリスト教の優しい愛と同情の倫理は、強固の倫理に対立する。まさに愛なき者こそ善人である、愛する者は悪人である。非人間は超人である、一方『人間』とは、“克服さるべき”“何ものかである”（ニーチェ著『ツァラトゥストラかく語りき』）。

ニーチェによると、悪しき人間は強い人間であるかぎり、良心は悪しき人間に返還して与

えられねばならない。ニーチェの追隨者たちが、何を造り出したかは周知のとおりである。」

「人間は、神から疎外したため、自己疎外した。…現代の脱キリスト教的倫理の方向喪失は、…罪が究極に置いて不信仰として、つまり神に対する敵意として理解されない時、罪は罪たることをやめるという事実を示してあまりある。

神に対する罪と人間に対する罪との両方が、同じ罪なのである。…

+

D.ボンヘッファーは、園の中央にある木から食べて、神のようになろうとした人間について、『中央が侵され、限界が踏みにじられた、今や人間が中央に立ち、そこで人間は限界を失った』と言っている。」

+

ローマ 1-2 章における、このような徹底した罪理解を前提として、使徒パウロは“義認論”を展開している。パウロの罪理解を徹底して理解することが、パウロの義認論を理解する前提である。

2018年10月23日～24日（生駒聖書学院） C.P.ベネマ著、安黒務訳『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価』翻訳刊行記念集中講義—④
「原罪論をめぐる奇妙な沈黙—この沈黙は何か」

<https://youtu.be/5szzfYTUCgQ>

+

NPP に立つ N.T.ライトの義認論に関する議論に入る前に、鈴木浩氏の論文「今、再び罪について考える...原罪論をめぐる奇妙な沈黙—この沈黙は何か、そしてその帰結は？」（『福音主義神学』47号「福音の理解—罪をめぐる」所収論文）に留意したい。

+

おおざっぱに言って『福音主義神学』誌は、最初1号～20号は、教義学的なテーマを主とし、福音主義神学会の基盤を確認、続く20号～40号は、その基礎の上に建てられる建物、福音主義神学会40周年記念号は、荒野の40年を回顧し、41号以降は「ネボ山から約束の地を見渡したモーセ」（申命記）に位置する。全国研究会議は、「福音主義神学、その行くべき方向」（I・II）は、聖書信仰と福音主義神学の未来を展望し、福音主義神学誌は、約束の地での新たな一歩として「福音の理解」の内容—(1)罪について、(2)信仰について、(3)義認について、意見交換をなしてきた。

+

この構成において、NPP（パウロ研究の新しい視点）の、宗教改革の遺産に対する議論が意識されていることが分かると思う。それは、NPP に対する議論のみならず、啓蒙思潮から発する、ここ二百年間の議論全体の中で思索されることが求められている。

+

鈴木浩氏の論文は、そのことを分かりやすく指摘しているので少し紹介しておきたい。

「プロテスタント教会の“統一戦線綱領”とも言うべき『義認論』に、現在、深刻な陰りが起きている。そしてその原因は、義認の教理の裏面の教理、つまり原罪論が沈黙を強いられているからである...一言で言えば、ここに究極的な原因があると思われるのです。言い換えれば、義認論と原罪論とは、同一のコインの裏表なのです。ですから、その片面が...この場合には原罪論ですが、...失われれば、もう一方が損なわれるのは、当然と言えば当然の成り行きなのです。」

+

「義認論は原罪論という前提の上に成立しました。ですから、義認論の力強さは、罪意識の深さに正確に比例しています。原罪論は罪意識の理由を説明する教理だからです。逆に言えば、罪意識が希薄になればなるほど、義認論の輝きは薄れます。なぜなら、『義認』という観念は、『罪の赦し』を中心とした概念群で成立しているからです。罪意識が希薄になれば、『罪の赦し』の『有意味』も薄れます。」

+

ルター以後、啓蒙主義時代になると、原罪論に対する批判が高まってきました。背景は、

ルターが前提にしていた人間理解と啓蒙主義以後の人間理解が決定的に乖離したからです。...『原罪論をめぐる奇妙な沈黙』...この沈黙は実は『奇妙』でも何でもないので。その後には人間理解の決定的な変化があったということなのです。」

+

「ルターのキーワード『神の尊厳』は後退し、『人間の尊厳』が声高に語られる時代なのである。...原罪論という教会の教理は、現在非常に深刻な困難を引き起こしている。...伝統的な原罪論だけでなく、総じて罪が見えなくなってきた時代なのである。」

+

「義認論がその前提である原罪論を失ったこと、言い換えれば、罪認識がかつてないほど希薄化したこと、再度言い換えれば、『脱アウグスティヌス的環境』の中に義認論が置かれるようになったこと、...それこそが、義認論にとって致命的な意味を持っているのである。」

+

わたしは、鈴木浩氏の論文「今、再び罪について考える...原罪論をめぐる奇妙な沈黙—この沈黙は何か、そしてその帰結は？」の論文は、サンダースの“ユダヤ教に対する新しい理解”、ダンの“律法についての新しい理解”、ライトの“義認についての新しい理解”の仮説が内包する問題を言い当てているように思うのである。

+

いよいよ、ベネマ著『パウロ研究の新しい視点—再考』そのものを扱う時がきた。この問題意識の焦点を理解できていれば、『パウロ研究の新しい視点—再考』の学びは大変有益なものになると思う。わたしの論文『福音主義義認論—NPP に立つ“N.T.ライトの義認論”に関する一考察』もまた、ここに焦点を当てた論文である。訳書と論文を重ね合わせるようにして、残された二つの講義に取り組みたい。

2018年10月23日～24日「⑤『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価」翻訳刊行記念集中講義—「NPPに立つ“N.T.ライトの義認論”と宗教改革の義認論の対比」

<https://youtu.be/Z8wmnCFfYPI>

+

肉体労働から、精神労働への切り替えの時期である。ところがこの切り替えがなかなか難しい。からだは動きたいのだが、頭は休んでいたい。そんな感じである。

礼拝説教は、ローマ人への手紙を開いている。先輩牧師から、ストットの序文にサンダース等への言及があり、わたしのベネマ翻訳がそれら箇所理解に役立ったと聞いた。それで、わたしも今ストットの“The Message of Romans”を読んでいる。

その序文のエッセイは、(1)手紙の影響、(2)古い伝統に対する新しい挑戦、(3)著述におけるパウロの目的、(4)ローマ書の概観、で構成されており、「(2)の古い伝統に対する新しい挑戦」の中で、クリスター・ステンダール、E.P.サンダース等に関する言及があり興味深い。ストットは、五つの問題点 (pp.27-29) を提起し、コンパクトに批評していて参考になる。

2018年10月23日～24日「⑥『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価」翻訳刊行記念集中講義—「福音主義義認論の座標軸における“二つの義認論”の神学的・社会学的ベクトル分析」

<https://youtu.be/CsOQLxq-sjQ>

+

上記の集中講義は、「⑥『パウロ研究の新しい視点』再考—宗教改革の視点と新しい視点に関する評価」翻訳刊行記念集中講義—「福音主義義認論の座標軸における“二つの義認論”の神学的・社会学的ベクトル分析」であり、特別講義の最後のビデオである。関心のある方には視聴していただきたい。詳細は、今年度末に刊行予定の、日本福音主義神学誌『福音主義神学』49号所収論文「福音主義義認論—NPP(パウロ研究の新しい視点)に立つ“N.T.ライトの義認論”に関する一考察」に記述してある。

+

さて、話は変わるが、米国での中間選挙が終わった。米国は、その昔、北部と南部で対立があり南北戦争を戦った。昨今の選挙をみると、東西両海岸は真っ青で、中部は真っ赤に染まっている。まるで二つの国に分断されているかのようにもみえる。

+

選挙前後には、日本の新聞記事やニュースでも、米国の福音派の動向についての記事が目立つようになった。また、次の奉仕への準備もかねてトランプ政権における米国大使館のエルサレム移転やイスラエルのヨルダン川西岸への入植地問題等に対するキリスト教会における“キリスト教シオニズム”運動の教えや実践について、今また振り返っている。来春、日本福音主義神学会中部部会主催の講演依頼があり、今日の米国におけるキリスト教会の動向をみるにつけ、“健全な終末論”理解が喫緊の課題となっているからである。

+

そのような中、二つの課題—神学的と社会学的課題を念頭に関連書籍の目配りをしている。その中の一冊、飯山雅史著『アメリカ福音派の変容と政治—1960年代からの政党再編成』は、興味深く読ませていただいている。元々民主党支持であった南部のキリスト教会が、人種分離政策での民主党のリベラル化で、共和党支持へとシフトしていったとの統計データに基づく社会学的分析・評価である。

+

福音派の動向と政治的影響については、週刊誌的でジャーナリスティックな報道や雑多な書籍が満ち溢れている中で、客観的で説得力のある本である。このような社会学的分析が必要な時代になっている。わたしは、神学教師であり、神学軸からのみ観察する傾向があるのだが、社会学軸の両面で、“複眼的”に分析・評価する者でありたいと願わされる良書である。